

I 発掘調査に至る経緯

大井町は、首都圏30Km圏内の県西南部に位置し、畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40年代のいわゆる地域開発ブームの渦中に、本町もさらされ、武蔵野の雑木林が工場に、畑が宅地へと化していった。

「だれもが住んでよかったといえる町」をつくりあげていく上で、町のもっている歴史的・伝統的基盤を正しく継承していくことは必要であり、不可欠のものでもある。町づくりは、地域の歴史を十分に学び、それを更に発展、推進していくことが望まれているが、この点にも、埋蔵文化財の発掘調査・保存・活用は、大いに貢献していくことも必要であろう。

大井町に40ヶ所ちかくの埋蔵文化財が確認されているが、これらは、すでに人々から忘れられて眠っているが、これらの遺跡は地域の悠久な歴史を語る私たちの財産であり、学校教育の大切な教材として、また、身近の歴史として、地域の発展過程をうつし出してくれている。

これらの地域開発の美名のもとによる都市化現象が、本遺跡群にも例外なく及んできており、ほとんどの遺跡が、滅失の危険にさらされている。

このため、本町では、埋蔵文化財保護の観点から、昭和53年度から、第一次5ヶ年計画で、国庫及び県費補助による事業として、開発行為に先だち、遺跡の発掘調査を実施してきた。東部遺跡群の今年度の発掘調査の実施した遺跡名、所在地、原因者、面積、調査期間は、下表のとおりである。

開発の原因は、個人住宅建設4件、農地の転地返し3件の、計7件で、調査総面積4,257 m^2 である。

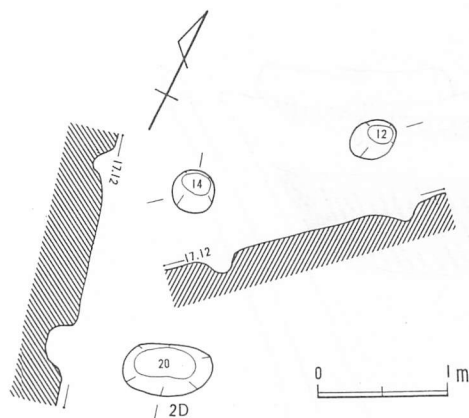
埋蔵文化財包蔵地における、このような蚕食的開発状況は、憂慮すべき事態にあり、新興住宅地として発展していく大井町に住む住民が大井をふるさとであるためには、豊かな自然環境の保存と共に、その歴史的環境、それは、大井町の歴史を形成してきた各種の埋蔵文化財の保存と活用を、これからの都市計画(町づくり)に位置づけていくことが求められてくるであろう。

	遺 跡 名	所 在 地	原因者	面 積	調 査 期 間
1	苗間東久保遺跡第3地点	大井町大字苗間字東久保 ⁶⁴²⁻¹¹⁻¹²	堀井 昌平	200 m^2	4.7
2	苗間東久保遺跡第4地点	〃 苗間字東久保 642	堀井 昌平	750 m^2	4.16~5.10
3	西ノ原遺跡第6地点	〃 苗間字西ノ原 170-2	倉持幸次郎	450 m^2	6.19~6.27
4	苗間東久保遺跡第5地点	〃 苗間字東久保 636-3	宮元 恒枝	106 m^2	9.8~9.24
5	西ノ原遺跡第7地点	〃 苗間字西ノ原 96-1	野沢 久子	563 m^2	10.1~10.29
6	西ノ原遺跡第8地点	〃 苗間字西ノ原 95-2~3	塩野 良子	661 m^2	10.30~11.14
7	苗間東久保遺跡第6地点	〃 苗間字東久保 639	堀井 昌平	577 m^2	11.27~12.26



第1図 苗間東久保遺跡調査区と地形 (1/5,000) (数字は調査地点)

2号土坑(第17図)



第17図 土坑(1/60)

B-3・4グリッドに位置し、平面形は長径65 cm、短径40 cmの楕円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面は鍋底形を呈する。深さは20 cmを測る。遺物の出土はない。

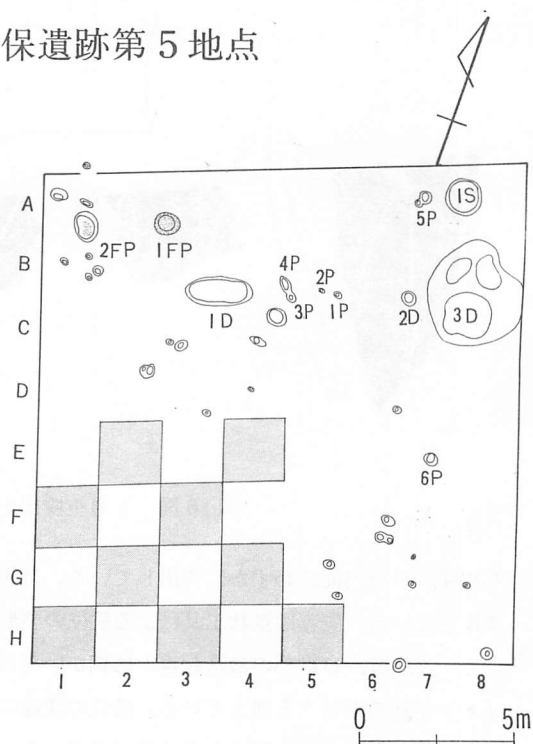
2本の柱穴は、深さが14 cm、12 cmと浅く、覆土も、3層のしまりのある黒色がいりこみ、中世以後の柱穴と思われる。他のグリッドからは、遺構は確認されず、1号土坑を使用した人々の生活の跡は、調査区よりも西または北に寄った地点にある可能性が高いが、今回、西ノ原遺跡で初めて確認された縄文後期前半の遺構と遺物は、今後の西ノ原遺跡の集落の解明と時代の流れをも一助してくれる非常に貴重なものとなった。

4. 苗間東久保遺跡第5地点

調査の概要と経過

2の第4地点から南西にわずか40 m離れた地点が調査区である。なだらかに南におりる斜面上に2 m方眼のグリッドを設定した。

調査区の北側は、地表面からローム面までの深さが70~80 cmあるが、南側におりるにつれて、ローム面までの深さは浅くなり、50 cm程度となる。遺構は、調査区の北側と、南東側に集中して検出された。今回の調査では、住居址は確認されず、土坑・柱穴が主要であった。遺物は比較的少なかった。第5地点は、第1地点と同様の地形にあり、第1地点も土坑・炉穴群の検出であり、今後の検討資料をもたらしした。



第18図 遺構分布図(1/300)

遺構（第19図）

本調査では、土壇3基、炉穴2基、集石1基、柱穴32本が確認された。以下それぞれの特徴を述べたい。

1号土壇

B-3～4グリッドに位置。平面形は、長径195cm、短径95cmの長楕円形、壁はなだらかに立ち上がり、断面形は鍋底状に近い形を呈し、深さは24cmを測る。遺物（第21図1・2）は、沈線文の施された土器片2点が出土している。

2号土壇

C-7グリッドに位置している。平面形は、長径65cm、短径55cmのほぼ円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形はU字状を呈し、深さは150cmを測る。堆積土は、非常によくしまり上層部は茶褐色土層で、中・下層部は黒褐色土層となり、最下層はベタつく。遺物（第21図3～6）は沈線を主体とする縄文後期の土器4片が中層部より出土している。

3号土壇

B・C-7・8グリッドに位置し、平面形は、長径310cm、短径270cmの不整形を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。深さは35cmを測る。この土壇は、ローム層が非常に攪乱されていて、平面プラン確認時の折には当惑した。覆土をしっかりと掘り込みの底から掘り進みようやく現形を確認した。遺物（第21図7～21）は、攪乱土出土も含めて15点の土器片であった。

1号集石

A-8グリッドに位置する。130個程の礫で構成され、90×100cmの範囲に集中している。長径130cm、短径120cmのほぼ円形を呈する掘り込みをもち、壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面は鍋底状を呈する。礫は、掘り込みの上部と下部にあり、上部は、5cm大の礫が多く、熱を受け、割れているものが多いが、下部は、15cm～20cmを計る大きなものも多く、熱は受けていない。遺物は、無文土器が3点伴っている。

1号炉穴

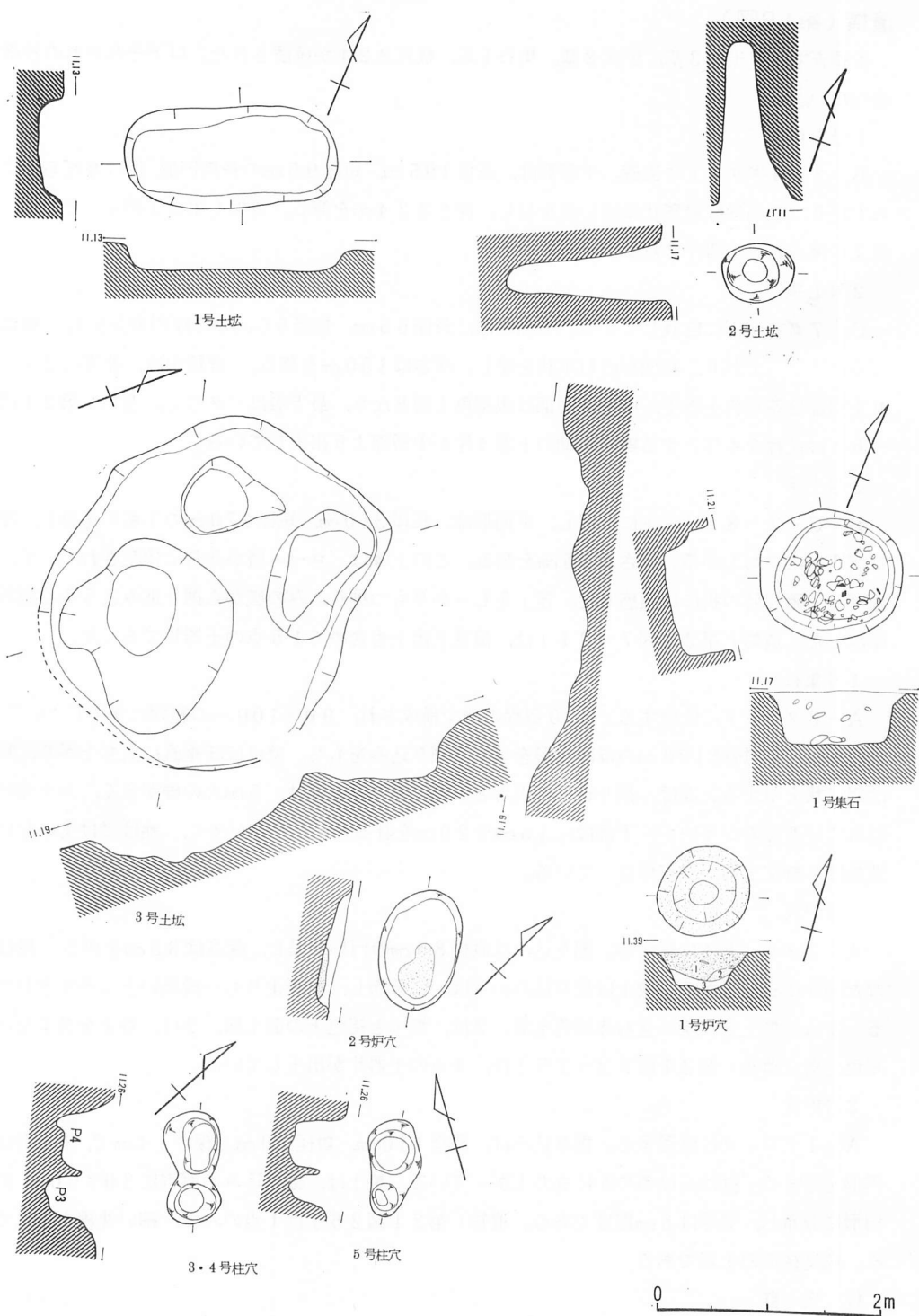
A-3グリッドに位置する。掘り込みは直径85cmの円形を呈し、深さは35cmを測る。壁は、なだらかに立ち上がる。焼土は掘り込みいっばいに分布し、壇底よりも一段高いところできれている。1は、焼土を大量に含む赤褐色土層、2は、焼土と褐色土の混土層、3は、焼土を含まない茶褐色土層。遺物（第21図22～25）は、4点の土器片が出土している。

2号炉穴

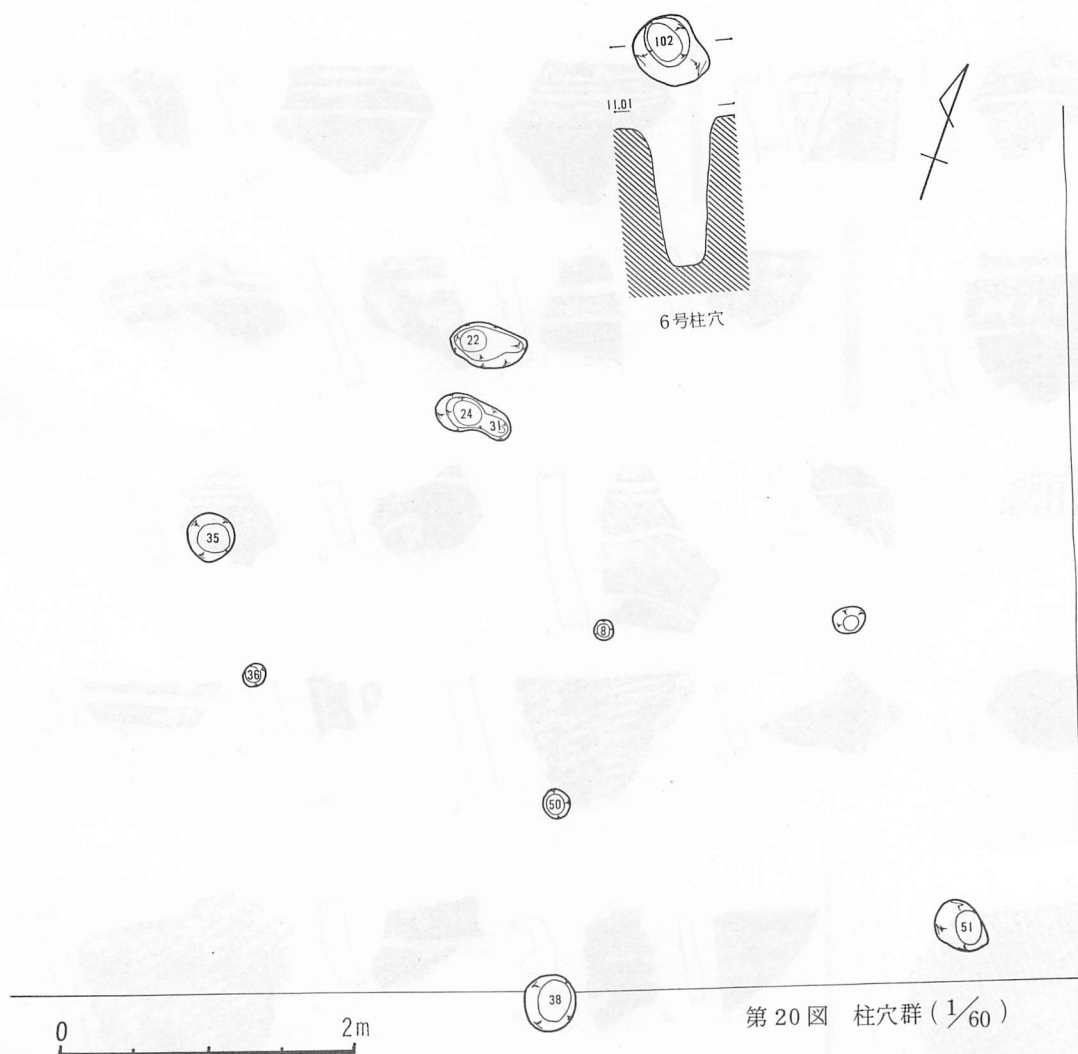
A-1グリッドに位置する。掘り込みは、長径110cm、短径70cm、深さ14cmで、平面形は楕円形を呈する。壁は、ゆるやかに立ち上がっている。焼土は、掘り込みの南寄に30×50cmの楕円形に分布し、層厚は8cm程度である。遺物（第21図26）は1点のみで、細い沈線を施してある。縄文後期の土器である。

柱 穴 群

柱穴は32本確認されたが、遺物の出土した柱穴は、3・4・5号柱穴の3本だけである。3号柱穴出土の遺物は（第21図27～29）3点で、27・29は沈線又、28は、細い沈線と



第19图 土坑·集石·炉穴·柱穴 (1/60)



第20図 柱穴群 (1/60)

縄文を斜位に施してある。4号柱穴からは(第21図30), 沈線を施してある土器1点である。5号柱穴からは(第21図31~33)3点出土している。31は磨消縄文によって三角形が描かれている。32は, 口縁部の2本の沈線下に隆帯をつけ, 刻目を施している。33は縦位に条痕文が施されている。

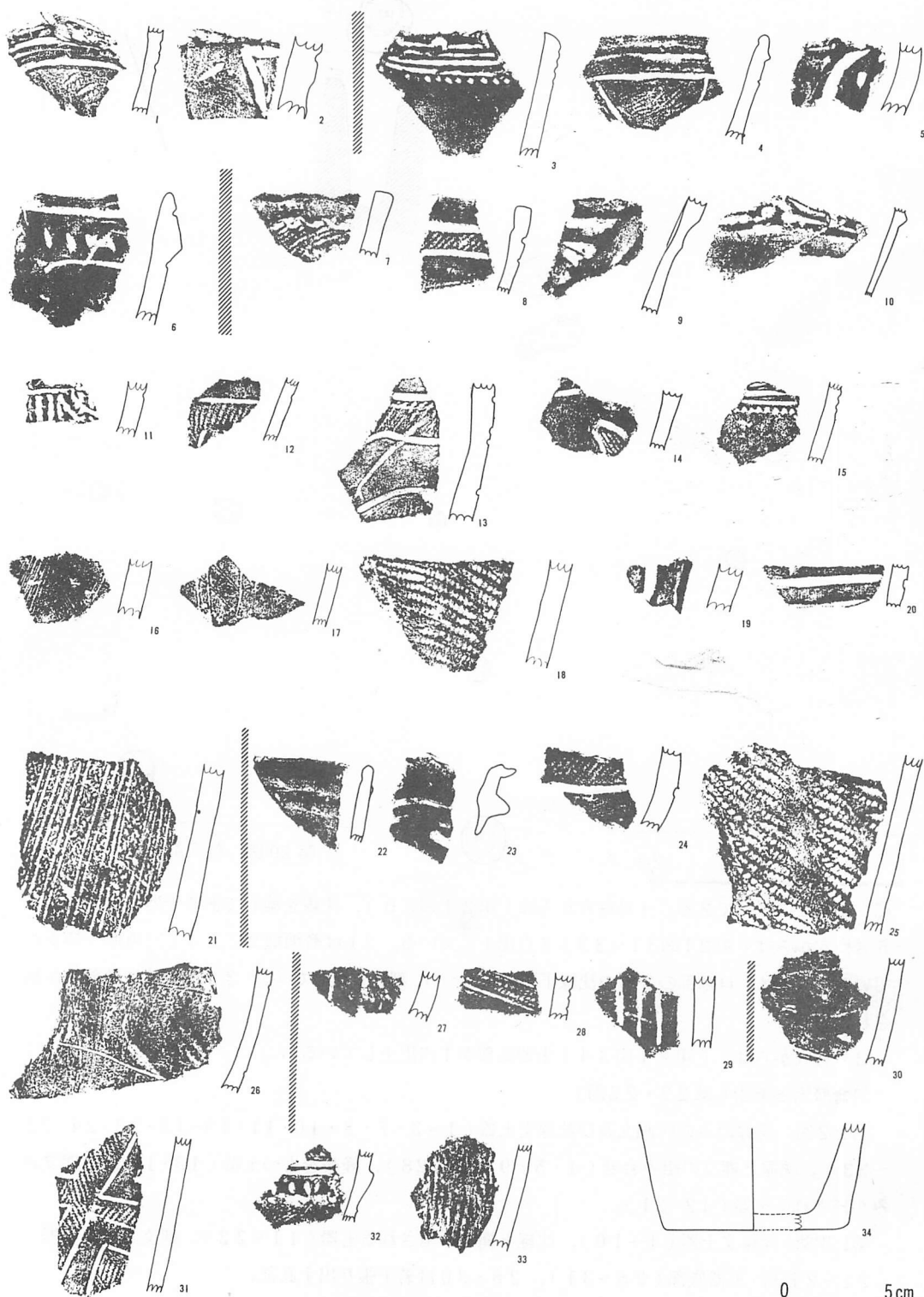
2号柱穴からは, (第21図34)土器底部が1点出土している。

包含層出土遺物(第22・23図)

第22図, 沈線のみ区画文及び沈線文土器(1~3・7・8・10・11・15~18・23・24・29~33)。沈線と縄文の組み合わせ(4・5・9・25~28), 隆帯をもつ土器(13・14), 縄文のみが施される土器(12・21)。

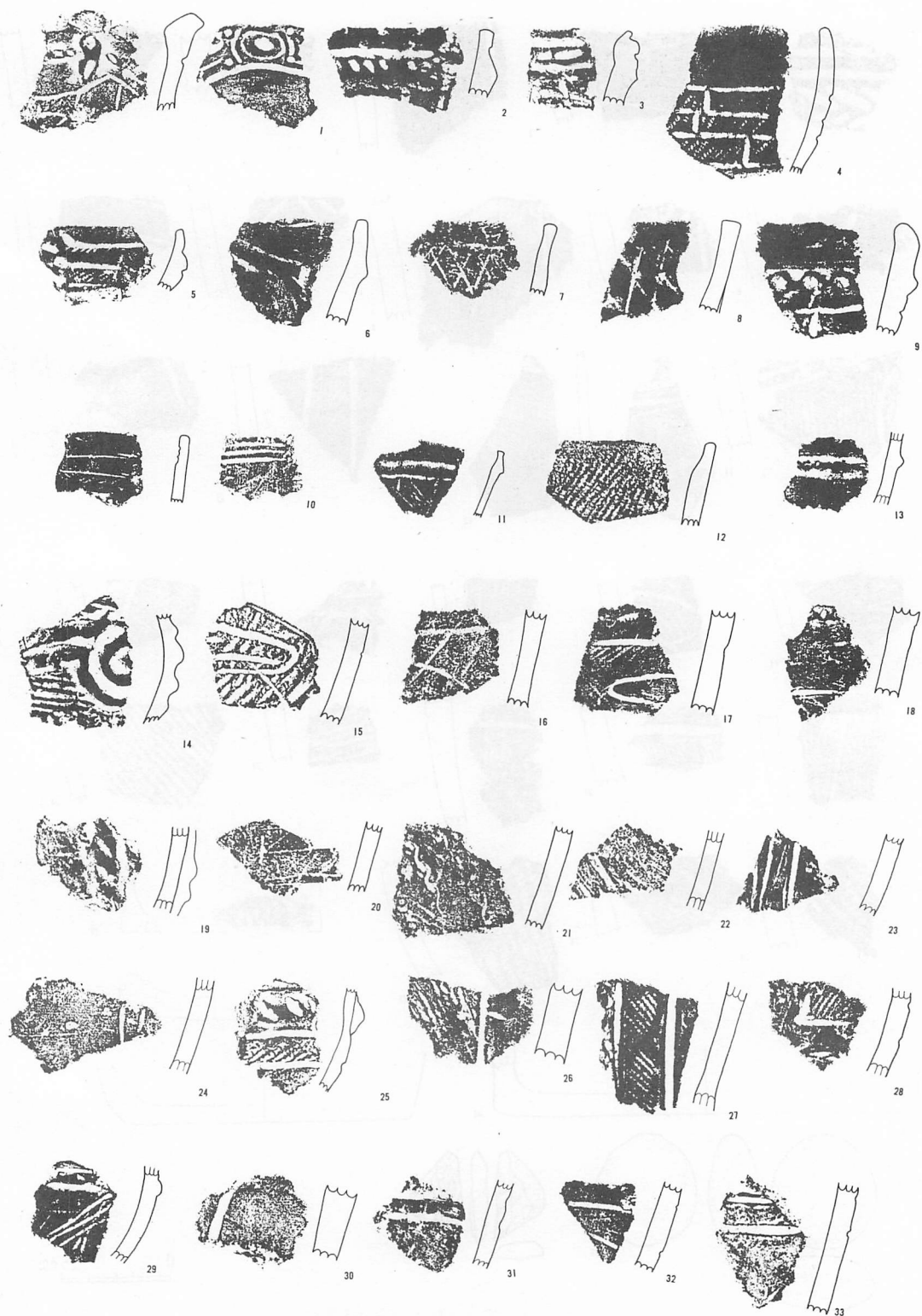
第23図, 沈線文土器(1~10), 沈線と縄文が施される土器(11~22), 縄文をもつ土器(23~27), 土器底部(28~31), 28・30は若干張り出す底部。

33はE-3グリッドのローム攪乱層より出土したチャート製のスクレイパー。

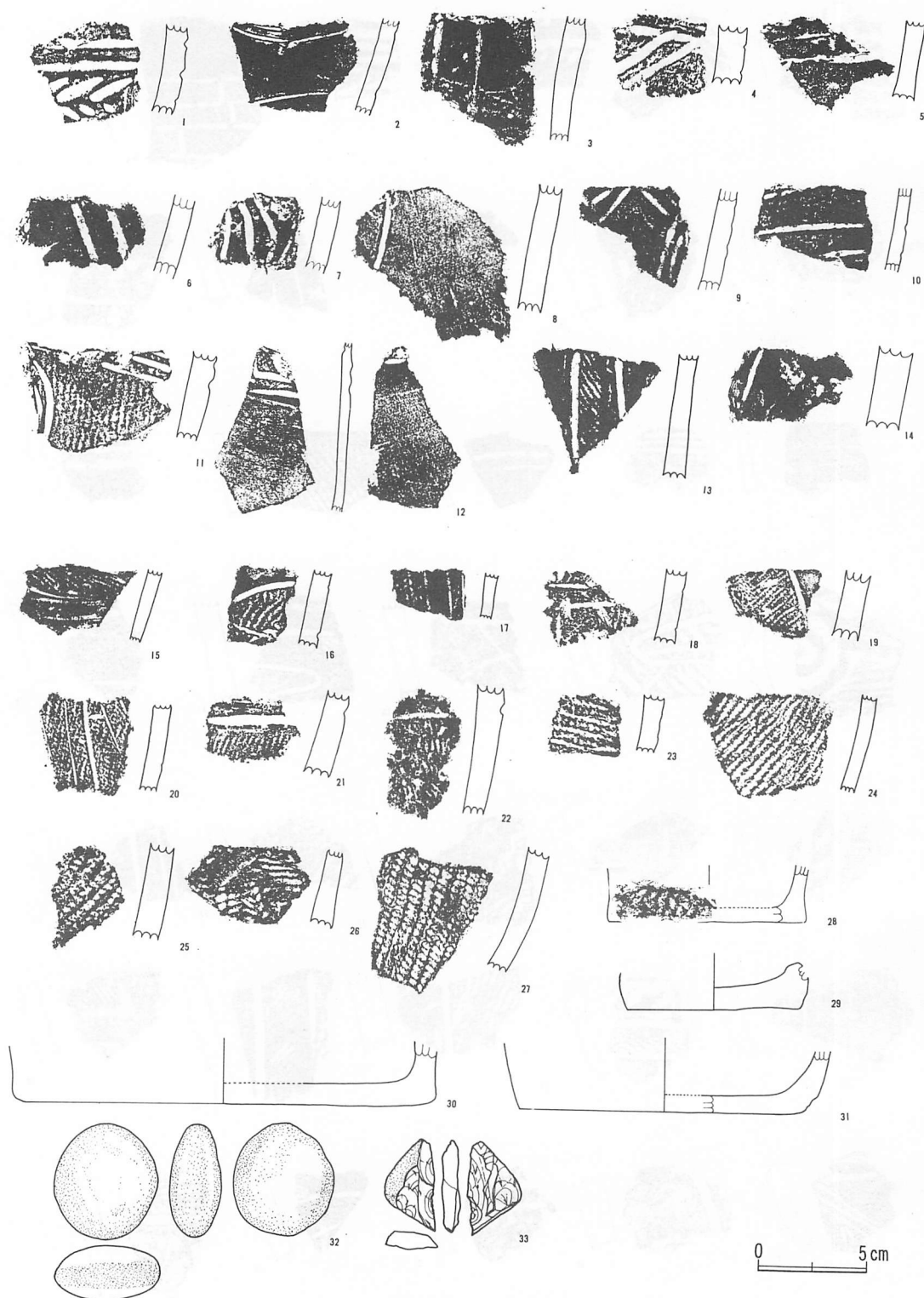


第 21 图 遺構出土土器 (1/3)

1・2 : 1号土壇 3 ~ 6 2号土壇
 7 ~ 21 : 2号土壇 22 ~ 25 1号炉穴
 26 : 3号土壇 27 ~ 29 3号炉穴
 30 4号柱穴 31 ~ 33 5号柱穴 34 : 2号柱穴



第22図 包含層・表採土器 (1/3)



第 23 図 包含層・表採遺物 (1/3)